近江古地誌解題（二）

増田忠雄

淡海地志と淡海錄との關係

先づ著作年代から云ふと京都本の淡海志には前述の如く元祿元年孟春日の序があり、高木本の淡海錄には元祿元年の淡海地志序がついてゐる、この兩序は同じものか否かは明かではないが元祿元年改元は貞享五年九月卅日であるから元祿元年には春は無かつた理けである。この點から見て著者の誤りか寫本の誤りか何れかであつて事實は元祿二年孟春ではあるまいか。彦根本淡海地志には元祿二年孟春月の序があり、京都本淡海地志にも全然同一の序がある。然るに彦根本には卷末に元祿二年中秋(中秋)の淡海錄跋がある。次いで高木本淡海錄には元祿三年の淡海錄自叙がある。斯る材料に依つて之を考察すれば元祿二年春、本書を編纂計畫當時淡海地志と稱して(又は淡海志)ゐたがその完成せる元祿二年秋頃より淡海錄とも題するように成り、更にその内容を整頓して元祿三年には正式に淡海錄なる題名に變更し、更に改訂して元祿七年頃には完全なる定本となつたものと推定される。

更に本の内容よりみるに彦根本淡海地志は江州土産とよく類似し、京都本淡海地志、淡海志は高木本淡海錄と類似してゐる。彦根本と高木本とを比較してみると彦根本は未だ原稿の域を脱せず雜然として最初淡海濫觴より名所を述べ、次で現在の郡高、御領、土産、湖船、海陸行程を述べ、再び歴史を説き又自然に及び、終りに

寺社本記、年中行事、雜錄を記してゐる。之に反し高木本は整然と自然の說明より始まり舊跡御城等の歷史を說明し次で現在の村高、湖船、行程、土產等現狀を述べ次で寺社本記、年中行事、雜錄に終つてゐる。この內容よりみても淡海地志が淡海錄に先行するものなるを知る。從て彥根本に似たる近州土產は更に彥根本に先行するものと推定される。高木本に似たる京都本は恐らく古き序のみを存せる彥根本の改訂原稿で高木本に先行するものならんと考へられる。

卷數より考察するに淡海錄十二卷が定本ならんと想はるゝも前述の如く二十五卷の異本のあるは如何なる理由か明かでない。

近江輿地志略　全百一卷　寒川辰淸編　享保十九年稿

本書は膳所藩の官選になるもので當時諸國に於て膨大なる官選國志編纂事業に促されたものであつて當地方の地誌として最も權威あるものである。

膳所藩主本多下總守康命、國志編纂の志ありたが辰淸辭して向坂長英に之を讓つた。然るに長英及び藩主康命同年に歿したので辰淸窃に筆を起して編纂を進めてゐたが享保十八年六月藩主、主膳正康敏の命に依り原著の漢文を書き改めて假名文となし半年を經て享保十九年三月完成したもので實に前後十數年を費した大著述である。然るに六十五年後の寬政十年に始めて世間に發表され藩主より幕府に獻じたのである。その後寫本として世間に流布したが誤寫多く（校定頭註）近江輿地志略（小島捨市編大正四年）にこの點の苦心が多大であつたことを述べられてゐる。同書に依れば寫本中の善本と認めらるゝものに馬杉本（馬杉庄平氏藏舊膳所藩庫本「晴輝書堂」の捺印あり）、甲賀衙本（甲賀郡役所藏舊信樂代官多羅尾家藏本）、大講聲本、朽木文庫本等がある由である。活版本としては前述の小島捨市氏編の本の他に同年に發行された日本歷史地理學會の大日本地誌大系中にあり、又最近の雄山閣發

行の大日本地誌大系中にも收められてゐる。

本書は初卷、序、凡例、總目錄。卷一、引用書、目次。卷二、建置沿革。卷三、藩封。卷四、道路。卷五、湖水。卷六—三九、志賀郡。以下、卷九四、高島郡に至る各郡別の叙述をなし卷九五、九六人物。卷九七—百に至る四卷に郡別に土產を記してある。本書は膳所藩の官選なる故その附近の志賀、栗太兩郡詳しく實に百卷の半數を費してゐる。即ち志賀郡は三四卷に亙り他郡は大多數二、三卷に過ぎず、やゝ詳しきは蒲生、坂田郡等のみである。特に彥根藩の記述は多くの不足を感ぜしむる。この爲め後述の淡海國木間攫の編纂となる次第である。

淡海溫故錄 全四卷 寫本八冊

本書は郡別に小地名を記しその地にある社寺の畧緣起や古事を記し特にその土地出身の元龜天正時代の武士の記述多く地誌と云ふよりも地方別に氏族系譜の說明をしたものゝ感がある。卷一の最初より栗本郡の記述に始り、巡次に十二郡を經て卷四に滋賀郡の記述を以つて終つてゐる。序も跋も無ければ編者も年代も不明であるが最近一見せる江左三郡錄なる明和二年の序のある本には盛んに溫故錄を引用してゐるのであつて少なくとも明和以前の編なることを知り得た。それを更に淡海地志、近江輿地志略の引用書目に無き故に享保以後とすれば更に本書の編纂年代が推定されるかも知れない。內容より考察すれば前述の如く德川幕府成立以前の武士の記述多けれども之はその當時のものと云ふよりも、寧ろ故意に德川幕政下の記事を書かなかつたものと想はる。唯栗太郡を栗本郡と記せるは如何なる理由に依るか倭名抄以來のことにて不審である。

江左三郡錄 全三冊 寫本

彥根を中心としたる犬上、愛知、坂田三郡の地誌であつて彥根の人餘江山珉、靑湖田包敎、二人の編である。卷一に明和乙酉の序があるので明和二年の編なるを知る。郡別に郡中高、村數、

郷名等を記し次いで各村の説明に及んでゐる。本書には前述の如く淡海温故錄の引用多くこの間に何等かの關係あるを想はしめる。要するに彦根附近の地誌としては相當に重要視すべきである。

淡海國木間攫（近江木間攫）　全十二卷寫本

湖東及び湖北の地誌であつて彦根藩下の地方なる犬上、愛知、神崎、坂田、淺井、伊香の六郡の精細なる記述がある。その記述方法は郡別にその郡の山川を説明し次で各村の名產、神社、寺院等が記述されてゐる。本書は題名の示す如く膳所藩の近江輿地志略が彦根藩下の地方の記述の不充分なるを補足する意味で木間攫と稱したのであつて、彦根藩郡奉行鹽野義陳の編に成るものであるが、彦根藩の官選とも謂ふべき本である。彦根圖書館にて借覽したる本には各卷に彦藩士源義陳編輯、同藩士橘信精校訂と卷初に記してあつたがその編纂年代は不明であつて小島捨市氏に依れば「天明頃の編ならん」と云ふ。

近江名所圖會　全四卷　版本

名所本系統の代表的な版本である。その內容は卷一江南之部には逢坂山より土山に至る東海道沿線の名所を記し、卷二西江之部一には三井寺と湖水を、卷三西江之部二には日吉山王、比良山、大溝等を、卷四江東之部には草津より彦根、柏原と東山道に沿える名所及び竹生島、余湖、伊吹山等の説明がある。この著者は名所圖會の代表作家秋里籬島、秦石田で書は蔀關月、西村中和である。本書は同一著者の東海道名所圖會（寛政九年）、伊勢參宮名所圖會（寛政九年）木曾路名所圖會（文化二年）より後の文化十一年に版本となつてゐるものであつて從つて近江の如く各街道の通過する國ではそれ等の名所圖會を集めて近江名所圖會が出來るのである。本書の卷一江西之部は「東海道」「及び伊勢參宮名所圖會」の卷一卷二を、卷二卷三の西江之部は伊勢參宮名所圖會の附錄を、卷四江東之部は木曾

路名所圖會の近江の部分を集めたものである。尙本書の卷一の卷頭には琵琶湖勝概全覽圖會と記してある。卷四の卷末には河内屋太助出版目錄があり、近江名所圖會後篇全部五冊とあるがこれは豫告に終つたらしい。

淡海要錄 全五卷 寫本二冊

大津の人堀池鈍齋の編纂したるものであつて弘化二年の序がある。同序に依り淡海錄の誤を訂正せんとせしものなるを知る。その目次を見るに淡海錄と殆んど同一である。即ち卷一、濫觴、舊都、古墟、古戰場、名山水。卷二、社寺、大津町、江湖水陸行程。卷三、叙嶺記、園城記、石山記、竹生島記。卷四、卷五、村名、石高帳、十二郡給所並村高帳であつて湖南の記述詳細なるを知り得る。

近江地誌略 上下二卷 版本

栗太郡志津村の人北川舜治(靜里)の著であつて、上下二卷より成り明治十年六月の版本である。上卷は全國總論及び滋賀、栗太、甲賀、野州、蒲生、神崎郡誌を記し、下卷は愛知、犬上、坂田、淺井、伊香、高島郡誌を記してある。更にその記述方法より内容を見るに全國總論には全國形勢、湖水景狀、幅員、各郡位置、郡民戸口、全國田圃、神社總數、寺院總數、學區總數、軍鎭、道路驛程、管轄沿革があり、各郡誌は全郡形勢、山岳、河川、原野、瀑布、田圃反別、區劃戸口、神社、寺院、學校、物産、村落市街陵墓、古城、古跡、古戰場より成つてゐる。本書の標題には滋賀縣管内地理書と冠せられ序に依れば初等鄕土教育を目的としたものであるが明治初年の滋賀縣の狀態を知るに充分參考になるものである。その目次は前述の如く尙前代の地誌的傾向を多分に存してゐるが一方には學校、學區、軍鎭など新時代を感ぜしむるものがある。

近江名跡案内記 全十二卷 活版本一冊

本書は前述の近江地誌略の著者北川舜治の著であつて明治二十三年の出版である。前者が教

育的とは云へ本格的な地誌略と稱したるに對し本書は名跡案内記と題したるだけにその記述方法も異にし、内容も神社佛閣名勝舊跡の記述が多い。その序に「官道ヲ以ッテ大段落ヲ立テ、郡ヲ中節目トナシ、莊若クハ郷ヲ小節目トス」とあるが如く案内記に相應しく街道を以つて大別してゐる點、異色があり名所本の名殘りを止めてゐる。即ち卷一、卷二、卷三は東海道。卷四、卷五は西近江路。卷六卷七は中仙道。卷八は御代參街道。卷九は朝鮮人街道。卷十、卷十一は北國街道。卷十二は北國脇往還となつてゐる。

尚、本書を以つて近江の古地誌時代の終りとし次いで大正昭和の郡誌編纂時代となるのである。

地誌的詩歌傳說集

以上を以つて大體主要な近江の地誌の解題を終つたが、その他に詩歌傳說等を交へた地誌的な本があるから紹介して置く。

江州湖水　寫本一冊　著者年代不詳

湖水之賦及び各名所の發句を載せ、後半には「唐崎の一松の事」と云ふが如き湖岸名所の傳說を記し江州村數、大津觀音巡りの如き地誌的なものもある。前述の江州土產に關係があるかも知れない。

琵琶湖志　二十卷　寫本

堅田本村宗耋の編であつて弘化二年九月成る。記事は郡別に記してあるが簡單で唯、名所舊跡の詩歌は全部網羅し近江名所詩歌集とも云ふべきである。

繪入八景詩歌　一冊

著者刊年不詳なるが近江八景に題せる詩歌を各一種を錄す。

近江湖水賦

森川許六の著にて風俗文選中に在り。

近州一景錄　三卷　版本

著者は不詳なるも刊年は安永四年である。佛

教關係の傳說を載せたる物語本で挿繪をはさむ。上卷は彌勒菩薩乃事以下拾の話、中卷は八つ、下卷五つの話より成つてゐる。

その他に佐々木家の日記と稱する江源武鑑、淺井家の事を記したる淺井三代記、降つて天保年間の甲賀百姓一揆を記したる百足再來記、天保義民錄(明治二十六年活版本)等の物語本、又は近江國城蹟記(一冊)江州武家古城記(一冊)等の特殊なるもの、近江國式社考(一冊寒川辰清)等がある。この小篇にては特に地方的な地誌には觸れなかつたが書目だけ擧げると栗太志(田中適齋)、栗太郡誌(山本栗齋)、湖西記(安永年間加賀藩士某)、彦根並近郷往古聞書(著者年代不詳、高商圖書館)がある。

終りにこの小篇作製に多大の御援助を賜はつた、彦根圖書館、長濱下郷文庫、彦根高商圖書館に深く感謝する次第である。(昭和九年盛夏)

新著紹介

○大塚地理學會論文集　第四輯　二五四頁　東京古今書院發行　九年十二月　定價二圓三〇錢

續刊されて行つて人文地理研究の趨勢を示し且つ研究者への指針となつてゐる本論文集第四輯は内田寛一・田中啓爾・花井重次・福井英一郎の諸先生が陣頭に立つて、多くの文理科大學生を率ひ、殊に本論文集の後半が學生の研究に成る靜岡縣下の人文地理の論文七篇を掲げてあることが著しい。各論文の著者と題目とを例によつて次に擧げる。(S)

花井重次　丹澤山地東南山麓地域の地形に就て(第一報)
福井英一郎　新潟縣下に於ける積雪の地域的研究(概報)
和田數雄　米澤市内に於ける屋敷内の土地利用の變遷
内田寛一　武藏野の計畫的開拓の一例(上)
櫻井豐記　大和川舊河床地域の村落境界
田中啓爾　近江盆地に於ける鐵道開通前の鹽及び魚の移入路に就いて
田中啓爾　靜岡地方に關する分擔研究(小序)
矢島仁吉　靜岡市を中心とする茶業の地理學的研究(概說)
尾原信彦　靜岡市の小工業地域
淺香幸雄　清水市の歴史地理學的研究(第一報)
伊藤郷平　靜岡縣久能山南麓に於ける早期苺栽培の立地に關する研究
上野福男　安倍川及大井川上流地域の人文地理學的考察(概報)